

第1部 事例紹介

事例紹介 1. ネパール村落振興・森林保全

— 星陽子 (元JICA派遣専門家) —

○司会 それでは、プロジェクトの事例紹介に入ります。質疑応答は最後に取りまとめさせていただきますので、ご協力のほどよろしく願いいたします。

初めに、ネパール村落振興・森林保全計画プロジェクトより、元社会・ジェンダー長期派遣専門家の星陽子様よりお願いいたします。

○星 (元JICA派遣専門家) 皆様こんにちは。ただいま紹介をいただきました星陽子でございます。本日はどうぞよろしく願いいたします。

私は2000年8月から2年間、ネパールの村落振興・森林保全計画の社会・ジェンダー専門家としてネパールの第2の都市でございますポカラで、このプロジェクトの社会・ジェンダー専門家として仕事をさせていただきました。本日でございますが、私の社会・ジェンダーの専門家として、その経験はつたないですが、その視点から、特に今、三国さんがおっしゃったように、いいコミュニケーションをするためにどうしたらいいか。もちろん、そのいいコミュニケーションには、人々に一緒にやってもらわなくてはいけないですが、今回のプロジェクトで私の社会・ジェンダーという視点から、実際にコミュニケーションに交ざってほしいが、交ざってもらえなかった人たちにどういう形で参加してもらえたかというところに焦点を絞ってお話をさせていただきます。

こちらですが、プロジェクトの目標で、ネパール山間地域に適応可能な、住民による計画、実行、モニタリング評価への積極的な参加を伴う、持続可能かつ公正な住民参加型村落資源管理モデルを開発するというように、参加もコミュニケーションのレベルも非常に高いものを求めています（注：14ページからのパワーポイント発表資料参照）。もちろんプロジェクトの支援という体制で実施をしていますが、実際にプロジェクトにかかわったのは村落の住民の方たちです。村の中に9つから10の集落がございまして、そこで集落保全委員会という委員会をつくってもらいまして、その人たちに大きく分けて2つのサブプロジェクトを実施してもらいました。1つはコミュニティーインフラ整備、例えば水場の保護であるとかトイレの設置、歩道の整備とかです。もう1つが社会・ジェンダーに特化した識字教育を核とした活動です。この2つの大きなサブプロジェクトを集落保全委員会の方々に自分たちで実施運営をしてもらえるように、私たちプロジェクトスタッフは支援しております。

それでは、皆さんがプロジェクトに参加するレベルはどうだったかということで、プロジェクトとして、

参加のレベルは大きく3つに分けられると思います。まず1つが、一番下のだいたい色のところです。個人で参加を呼びかけた際に、その情報が収集できるか。例えば、私たちのプロジェクトでこういう活動しますから、ぜひ来てくださいとマイクを通して、あるいは新聞とかラジオかとか、そういったメディアを通して参加を呼びかけるわけです。そのときに、新聞を読めるかどうか。新聞で呼びかけをしたのにも関わらず、新聞を読めるかどうかはまず1つ大事なことです。それから、ラジオを通して。つまり、ラジオを通してということは、ラジオを持っているかどうか。それから、耳が聞こえるかどうか。それから、人づてを通して。つまり、人づてということは、人間関係が構築されているかどうか。こういったものがまず個人的な基本の情報収集の能力になると思います。そのレベルから、さらに上に上がったレベル、つまり対外的。個人的、基本的な情報をもとに、参加の呼びかけに気づいて、まず情報として、ツールとして持って、それをプロジェクトの方に、こういったものがあると聞いたんだけど、それに参加したいのはどうしたらいいかと自分から交渉できる力があるかどうか、次の参加のレベルだと思います。そして、最終的に高い参加のレベルとしては、もう自分たちで組織から動いていく。つまり、相互依存、お互いに助け合う。例えば水場の保護をしたい、自分たちで水場をつくりたい。じゃ、お互いに水場に必要なおセメントであるとか、パイプであるとか、そういった物資を自分たちで工面できるようになる。こうなった場合には、もうプロジェクトとしては支援のレベルとしては非常に低いです。ですから、自分たちでエンパワーメントする力も、参加のレベルが上に上がれば上がるほど強くなっていくと思います。

これをちょっと頭に入れていただいて、じゃ、ネパールで私たちのプロジェクトではどうであったかということです。実際に村の中ではエンパワーメント、つまり自分たちで積極的に参加ができるかどうかという範疇に入った人たちは、村の有力者であるとか、金持ち、男性、高カースト層の人たちが大部分でした。その下に、例えば参加がしたくてもできない人たち、女性であるとか、低カースト層が実際におりました。問題は、このプロジェクトとしての大きな鍵を握る人たちが、実はこの女性と低カースト層、特に非識字の女性が私たちのプロジェクトの村落振興・森林保全の大きな鍵を握る人たちでした。その理由としましては、ネパールでは、ご存じのとおり非常に貧しい国ですので、失業率も非常に高いです。村では50%から60%の失業率と言われています。そのために、村の男性が都市部に、あるいは海外に出稼ぎに行ってしまう。村の中で、特に20代から40代の非常に重要な労働人口である男の人たちの大部分が出稼ぎに行ってしまう。私たちのプロジェクトの対象地域では、労働力となる女性と男性の比率が2対1で女性が圧倒的に多かった。つまり、村落資源管理を含めた村の必要な重要事項の活動に参加すべき人間が女性であったわけです。にもかかわらず、ネパールの文化、宗教的な面もありますけれども、女性は入っていきなかつた。なぜか。まず教育を受けることができず、字が読めない。ということは、先ほども申しましたように、情報収集能力も持っていないわけです。エンパワーメントされた村の有力者、上の黄色の

部分（注：パワーポイントで示した三角形）の人たちが情報を操作してしまうので、肝心の女性たち、あるいは低カースト層にそういった情報も伝わっていかない。ますます女性たちは村落資源管理に必要な——村落資源というのは、水であるとか、薪であるとかです。ネパールではここですべて女性が大きな役割を果たしているのですが、そういう決定権を持っていないということが判明しました。

ということで、プロジェクトとしては、こういった人たちにもぜひ参加してほしい。ただ、その参加のレベルがまだまだ積極的に参加するところのレベルに至っていない。こちらの方のニーズ、参加のレベルが異なるのに、一方的な支援方法をとってはいは、こういった人たちは参加してくれません。水が欲しいという人間にパンをあげても要らないというのは当然のことで、これと同じようなことが、女性たちにとっては環境よりも、まず自分たちでエンパワーメントするためのツールがもっと必要だったのです。それが識字であるというところに、プロジェクトとしては注目しました。それでは、この女性たちに読み書きをまず覚えてもらおうという働きかけをしました。

もちろん識字教育だけではなくて、それ以外にも識字の女性が参加できるように、この4つのコンポーネント（注：パワーポイントの表参照）を絡ませて活動を開始しました。まず、成人識字教室の運営。それから女性委員30%ルール。これは先ほど申しました集落保全委員会、つまり村落資源管理に重要な決定権を握る委員会ですが、この委員会は大体5人から10人ぐらいいます。そこのメンバーに必ず女性を30%参加させること。そうでないとプロジェクトから資金援助をしませんということをルールとして徹底しました。それから、カウンターパート、住民男女の方に、どうしてこういう住民配慮、こういった非識字の女性の参加が重要であるかということ、ワークショップ等を通して皆さんに理解してもらおうようにしました。

ということで、活動の風景を皆さんに見ていただきたいと思います。

成人識字教室ですけど、こういった形で皆さん教室で一生懸命勉強しています。

それから、これは夜ですが、外で皆さん暗い中で成人識字教室——女性を対象にしていますが——の活動をしました。

識字教室を通して、この前の女性は字を書けるようになったことから、非常に自信を持ってくれまして、自分の意見をこういった人前で話すようになりました。これは非常に進歩です。ご存じかもしれませんが、ネパールで女性たちが人前で話せるようになるということは非常に大きなエンパワーメントの指標になります。

それから、コミュニティーインフラ整備。先ほども申しましたように、集落保全委員会では、コミュニティーインフラと社会・ジェンダーに特化した成人識字教室の運営の2つの大きなサブプロジェクトがありました。このコミュニティーインフラに女性が積極的に参加している様子。これはちなみに水路をつく

っているところです。これは別にやらせでも何でもなくて、本当に女性だけで皆さん水路の材料を運んだりということをしておりました。実際に男性ももちろんいるのですけれども、この集落に限っては、女性たちがこのときは集まって水路の工事をしていた。

村落資源管理のワークショップ。こういった形で皆さんに集まってもらって、自分たちの村落資源管理をどういうふうにしてやっていくかという話し合いを持ってもらいました。

実際に集落での会議はどうだったか。この写真でも皆さんわかると思いますが、やはり男性の方が前に立たれて、女性の方が後ろということになります。先ほどの写真と矛盾しますが、やはりこういった決定権を握る大きな会議になると、男性が前に座って、女性は後ろで余り意見を言う機会がなくなってしまうというのがまだまだ現状です。

こういったプロジェクト活動を通してどういった成果が得られたか。先ほど申しましたなかなか参加できなかった女性がどうなってきたかということ、皆さんに今ご説明させていただきます。成人識字教室を通して読み書きができるようになった女性が自信をつけ、集会に積極的に参加するようになりました。先ほどと重複しますが、まず名前が書けることで、皆さん非常に自信を持ちました。私も感動しました。名前が書けた。名前が書けると、今度は、自分の名前を人前と言えようようになります。この自信が、今度はさらに、私は人前で意見も何か言っているんだという自信になります。自分たちの意見を言えるようになる。もう1つ、私たちとしては、ただの成人識字教室ではなくて、村落資源管理が重要であるという環境教育をできるだけ取り込もうとした教科書を独自に開発しました。その教科書を通して皆さんに勉強してもらった結果、女性たちが非常に意識を持って、その教科書を通して村落資源管理の重要性を勉強しました。女性たちが家庭に帰って、また勉強します。そうすると、子供たちももちろん一緒に勉強するわけです。親の背中を見て子は育つということだと思っただけですが、お母さんが勉強していることを子供たちも一緒に勉強する。家庭の中で環境教育の重要性が話し合われて、そこからまたフィードバックされて女性たちが、環境の大事さを家庭で話した、ということ、今後は識字教室で話す。自分たちで何ができるかということ、話し合ひまして、例えば植林をすべきではないかという話が出て、実際にプロジェクトからの支援ではなくて、自分たちで植林をしようという決断をしたグループもありました。

それから、女性委員30%参加の規則をつくりました。皆さんできちっとルールをつくってもらいました。私たち自身、オペレーショナルガイドラインというものをつくったのです。そこで女性が必ず集落保全委員会、ここが重要な決定権を握る委員ですが、そこに女性を必ず30%入れてくださいという取り決めをしました。実際に最初は、なぜそういう必要があるのかと、理解してもらえず混乱もありました。それをまず、先ほど説明しましたように、村では女性の方が村落資源管理に多くかかわっているということ、これを納得してもらい、またカウンターパートの人たちにも、実際にワークショップ等を通して重要性を理

解してもらいました。こういった形で、とにかく女性が参加しないとプロジェクトは支援しないという観念ができてきたということもあって、皆さん納得して活動をしてもらうようになり、女性たちも積極的に活動するようになりました。そこでまたコミュニケーションが男女で図られるようになりました。

次に、住民の相互扶助によるエンパワーメントが促進されました。プロジェクトが支援するのではなく、住民の相互扶助によるプロジェクト活動により、住民自身のオーナーシップが強化されました。残念ながら、ネパールは援助疲れが結構蔓延しています。私たちが対象としていたプロジェクトの住民も、あなたたちは私たちに何をしてくれるのか、という問いかけが結構ありました。そのときに私たちは、あなたたちが自分たちで考える活動を明確にしない限り、私たちは支援することはできないということを徹底しました。日本人の専門家を含めて私たちは、住民の皆さんが最初にどういったことをしたいのかというところを明確にした時点で、それではプロジェクトとしてこういう支援ができますというプロセスの方法を徹底しました。それから、先ほどの女性委員30%ルールというのを言いましたが、これは最初に私たち日本人を含めた側がたたき台をつくって、住民の方たちに提示して守ってもらうようにしました。そこからこういったオーナーシップが芽生えた住民の人たちが、この規則では私たちは参加活動、促進活動をするのがなかなか厳しいので、こういった規則をつくってほしいという提示をしてくれるようになりました。例えば先ほどの成人識字教室を集落保全委員会の人に担当してもらいました。そのお金を集落保全委員会の人が入分のポケットに入れてしまう。そうなったときの罰則が、もし集落保全委員会の人たちがお金を横領した場合、ポケットに入れた場合は、その成人識字教室のみがもう実行ができない、支援しないとプロジェクトの方で決めました。これでは結局よくないと。一生懸命支援している集落保全委員会の方たちから、それでは不公平ではないかという話がありまして、そうなった場合は、もう1つのコンポーネントであったインフラストラクチャー、コミュニティーインフラの方のサブプロジェクトもプロジェクトは支援すべきではない、という提案が何とカウンターパートの方からありました。このように、自分たちでオーナーシップを育てていくという意識が少しずつ芽生えてきたように思います。

それから、カウンターパートの方たちの能力が向上したということも1つ大きいと思います。私たち日本人スタッフは、安全上の都合から村に行くことができませんでした。それでカウンターパートの方に、村の住民の人たちと私たちポカラに滞在している日本人スタッフの人たちの橋渡しをしてもらいました。この際に、最初は問題をそのまま村から持ってきて、解決方法を私たちに訊いていました。しかし、その解決を今度はカウンターパートの人たちが自分たちで住民の人に教えられるようになった、というところは非常に大きいと思います。

最終的に、まず大事なことは、本当に参加したい人間が参加しているのかどうかというところを確認すべきである。参加したくてもできない人間は、なぜ参加できないかというところを汲み取って、それを住

民の活動に入れる。先ほどの話もございましたが、環境と、木を植えて10年後にミカンが食べられるか、明日ミカンが食べられるかとなったら、もちろん明日のことを考えるわけです。でも、環境を考えた場合に、こちらのプロジェクトとして考えているニーズと、住民の皆さんが考えているニーズを融合させて、住民の皆さんが考えたニーズをまず優先させた形で、かつ私たち環境保全の活動も組み込んでいくということ、オーナーシップをまず養成するということが非常に重要かと思います。こういった形でエンパワーメント、あるいはオーナーシップが向上することにより、自分たちで環境保全を図るという積極的・持続的参加が可能になるということが私たちプロジェクトとしても大変勉強になりました。

以上です。ありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございました。

事例発表1「ネパール村落振興・森林保全」
 (星陽子/元JICA派遣専門家)

**環境保全活動への
 持続的・積極的参加を求めて**

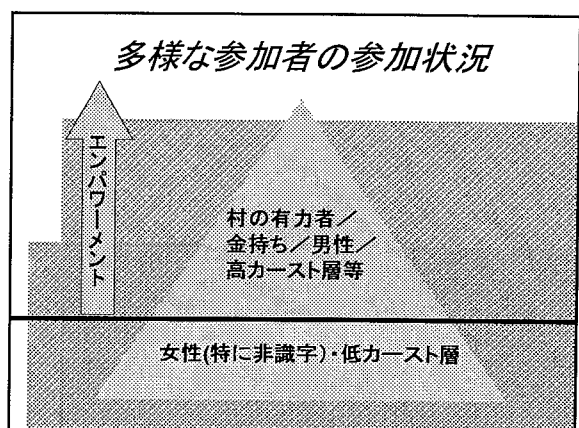
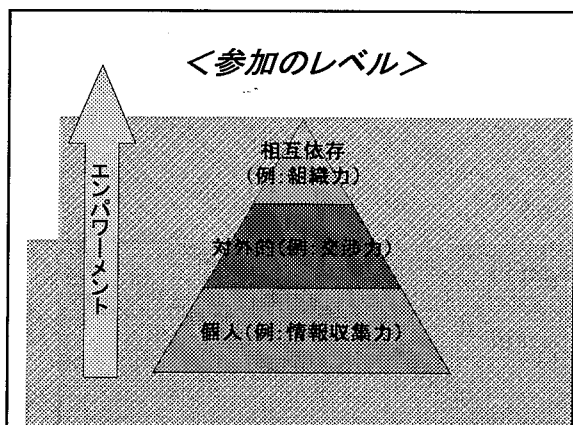
ネパール村落振興・森林保全計画II

旧社会・ジェンダー専門家

星 陽子

プロジェクト目標

ネパール山間地域に適応可能な、住民による計画、実行、モニタリング評価への積極的な参加を伴う、持続可能な公正な住民参加型村落資源管理モデルを開発する。



参加者の異なる参加レベル

参加レベルに応じた手法の活用
 (特に参加が重要であるが、参加が不可能な住民への配慮)

非識字女性の参加促進を目指して

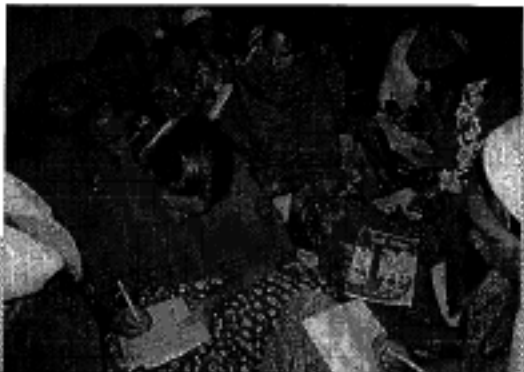
女性の成人識字
 教室運営

女性委員30%
 ルール

カウンターパート
 のジェンダー配
 慮

住民男女の
 ジェンダー配
 慮

成人女性識字教室



成人女性識字教室



識字を介して活発に発言できるようになった女性達



コミュニティインフラ整備への女性の積極的参加



男女平等参加: 村落資源管理ワークショップ



男女平等参加の促進: 集落での会議



住民参加による村落資源管理 ～積極性と持続性を求めて～

<成人女性識字教室による効果>

- ・読み書きができるようになった女性達が、自信をつけ、集会に積極的に参加するようになった。
- ・村落資源管理の重要性を統合した独自の教科書を開発したことで、女性達の認識が高まった。

<女性委員30%参加の規則の効果>

- ・“女性が不参加の活動は、非効率・非効果的である。”という概念が浸透した。

住民参加による村落資源管理 ～積極性と持続性を求めて～

<住民の相互扶助によるエンパワーメント>

- ・プロジェクトが支援するのではなく、住民の相互扶助によるプロジェクト活動により、住民自身のオーナーシップが強化された。
- ・住民自身が参加規則を見直す能力が芽生えた。

<カウンターパート能力向上>

- ・参加者の参加状況の多様性に対応した業務活動・啓蒙普及活動の質が向上した。
- ・外国の援助に頼るのではなく、自分達での国造り精神(オーナーシップ)に目覚めた。

